高校・岡山県知事賞

表現できる自分らしさ

岡山市・岡山南高２年　佐藤　樹奈さん

「棺桶（かんおけ）」。そう聞くと悲しい、恐れといったマイナスなイメージを持ってしまう。デザインというと服や帽子、靴など身につけるものを想像しがちである。自分に個性や自信を持たせてくれるデザイン。これは棺桶にもできることを知った。

布施美佳子さんは、20代の頃に参列した友人の葬儀で、「明るくておしゃれだった人柄が見えてこない」と感じたという。確かに、日本の葬儀で最も多いと言われている仏式といえば黒っぽい服を着て、静かに故人を見送るというのが一般的である。私も、葬儀は、自分らしさを出すような場面ではないと思っていた。

しかし、布施さんのような「人生のゴールなのだからその人らしさを表現したい」という考えを持つ人もいることを知った。布施さんの取り組みは、私のような固定観念をなくす糸口となる。

固定観念にとらわれることが決して悪いわけではない。しかし、固定観念というのは、その人の思考そのものを支配してしまう。固定観念にとらわれることにより、それ以上考えることをやめてしまう。その結果、自分では傷つけるつもりはなくても、人を傷つけてしまうかもしれない。

固定観念にとらわれない生き方をするには、より多くの情報を収集し整理することが重要だ。より多くの情報を手に入れることで、自分が当たり前だと思っていた事柄に新たな一面が見える。実際、私もそうだ。この記事を読む前と後では、葬儀や死に対する意識が変わった。新聞、ＳＮＳ、本、テレビなどインターネットが普及している現代だからこそ、固定観念をなくすチャンスがいくつもあることが分かった。

しかし、チャンスがいくらあっても、変えようという意識がないと上手くいかない。固定観念があると気づくのは、自分が固定観念によって傷つけられた時くらいだろう。だから、物事を「自分ごと」として考えることがいかに大切かが分かる。これは、布施さんが企画した体験会の「入棺体験」にも通ずる部分がある。この入棺体験をした記者は、「死んだらこんな感じなのかも」「もっと旅行に行きたかった」などと述べていた。「死」を自分ごととして考えることで、人生に関わる視野を広げることができたのではないだろうか。このような経験がきっかけで、自分の考え方や意識が変わるのは素晴らしいことだと思う。布施さんのように、固定観念にとらわれず、行動できる、そんなカッコいい大人になっていたい。

2023年８月29日付　読売新聞

寸評

自分らしい棺桶のデザインについての記事を基に、固定観念にとらわれない生き方を考えています。新聞を読んで、自分の中で「当たり前」が、そうでなくなった瞬間を捉えることができました。

（C）山陽新聞社　無断複製・転載を禁じます。